

医師・看護師・介護職員的大幅増員を

日本医労連増員闘争ニュース

第 80 号

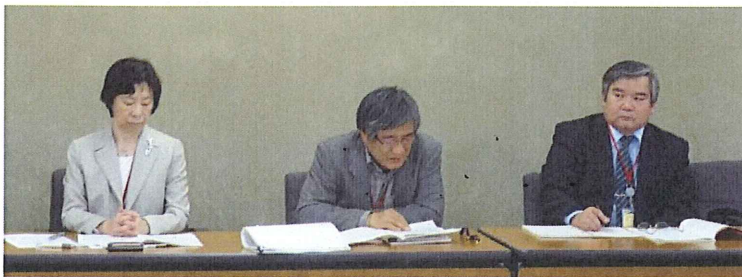
2010 年 4 月 27 日

日本医労連増員闘争本部

TEL: 03-3875-5871

FAX: 03-3875-6270

看護職員の労働実態調査 26日記者会見しました



日本医労連は、4月26日、27,545名分の「看護職員の労働実態調査」の記者会見を行いました。厚生労働記者クラブ、日比谷クラブ、三田クラブの3カ所で行い、合計21社が集まりました。26日夜の新幹線のテロップでも流れたよう

です。27日朝に報道された記事をお知らせします。

【毎日新聞 4月27日朝刊】

看護職員 過酷な労働環境

病院や診療所などで働く看護職員の約7割が慢性疲労を訴え、鎮痛剤や睡眠剤など何らかの薬を常用している割合は約6割に上り、妊娠者のうち3人に1人は流産の前兆である切迫流産を経験していたことが日本医療労働組合連合会（医労連）の調査で分かった。医労連は「慢性的な人手不足

薬の常用6割
切迫流産3割

医労連調査

による過重労働が原因とみられる。不当なサービス残業も横行しており、法令遵守を関係機関に徹底させた

次ページへ

【MEDIFAX 2010年4月27日】

■看護職員の7割超が慢性疲労 医労連が労働実態調査

医労連は26日、「看護職員の労働実態調査」の中間報告を発表した。調査は、都道府県医労連などを通して、病院や診療所、介護施設で働く看護職員(保健師、助産師、看護師、准看護師)を対象に実施し、2万7545枚の有効回答を集計した。73.5%の看護職員が「翌日に疲れが残る」「いつも疲れている」と回答し「慢性疲労」の状態にあることが分かった。また「健康不安」は61.8%に上った。

医労連中央執行委員会の田中千恵子委員長は調査結果に対して、看護職員が過重労働で厳しい状況にあるとの認識を示した上で「夜勤や残業、勤務間隔に規制が必要。辞めない職場づくりをしていかななくてはならない」とした。

1年前と比較した仕事量は「大幅に増えた」が26.7%、「若干増えた」が36.4%で合わせて6割を超えたほか、約9割が時間外労働に従事していた。

休憩時間が「きちんと取れている」と答えたのは、日勤で23.9%、準夜勤で11.8%、深夜勤で17.2%、2交代勤務で16.7%となり、特に準夜勤では休憩時間が「全く取れていない」が6.9%、「あまり取れていない」が44.1%となった。3年以内に

仕事上のミスやニアミスを起こしたことがあるとの回答は86.9%だった。医療・看護事故が続く大きな原因として何が考えられるかを尋ねたところ、「慢性的な人手不足による医療現場の忙しさ」が84.9%で、「交代制勤務による疲労の蓄積」の32.7%、「看護の知識や技術の未熟さ」の31.0%と続いた。現場の忙しさは健康実態にも大きな影響を与えており、疲れの回復具合について「疲れが翌日に残ることが多い」が51.2%、「休日でも回復せず、いつも疲れている」が22.3%となり、看護職員の73.5%が「慢性疲労」の状態にあることが分かった。また、健康状況では「健康に不安」と「大変不安」が合わせて61.8%に上った。

●セクハラ16.3%、パワハラ25.6%

ハラスメントの実態についても調査した。看護職員の16.3%が「セクハラを受けることがある」と回答。相手は患者が62.7%、医師が22.5%となった。「パワハラを受けたことがある」は25.6%で、相手は看護部門の上司が43.0%、医師が30.3%、患者が10.6%、同僚が8.2%となった。(次ページへ)

看護職員7割「慢性疲労」

「慢性疲労」を訴える看護職員の割合が7割を超えていることが26日、日本医療労働組合連合会(医労連)のアンケートでわかった。約20年前の調査に比べ、約7割の上昇。国の指針で「月8回以内」と

定められた看護師らの夜勤は、31.7%の職員が9回以上していることもわかった。アンケートは、2009年11月からの2カ月間実施。全国の病院や施設に勤める看護師や保健師の計2万7545

人が回答した。

健康状態の質問で、「疲れが翌日に残ることが多い」(51.2%)、「休日でも回復せず、いつも疲れている」(22.3%)の「慢性疲労」を回答したのは73.5%いた。「健康に不安」があると答えた職員も6割を超えた。

(月館彩子)

看護職員 全国調査 7割が慢性疲労 切迫流産経験者も増加

日本医労連

全国の看護職員約2万7千人の健康状態について日本医労連が実施した調査で、「慢性疲労」を感じているとした人が7割を超え、妊娠をしたことがある約3500人の3人に1人は、流産になりかける「切迫流産」を経験したと答えたことが26日、分かった。

医労連は「人手不足は深刻で健康を害する人が増えている。国に人員増などによる労働条件改善を求める」として

調査は昨年11月～今年1月、全国の医療機関や介護施設で働く看護師、准看護師、保健師、助産師を対象に実施。約6万人に調査票を配布し、計約2万7500人が回答。女性が94%を占めた。

健康状態が「非常に不調」「やや不調」とした人は計37・8%。「疲れが翌日に残る」「いつか寝てしまう」と答えた人は78・5%に上り、1988年の調査に比べ7・2割増えた。「健康に不安がある」は61・8%で、鎮痛剤や睡眠薬など何らかの薬を常用しているのは約6割に上った。

一方、2006年4月以降に妊娠経験がある約3500人のうち、切迫流産となった人が34・3%、「流産」は11・2%で、88年の調査に比べそれぞれ10割、7・5割増加。妊娠時に夜勤や当直を免除された人は66・7%にとり、1988年の妊婦への配置転換は19・4%、「つわり休暇」も7・8%と低かった。

「業務過密」 県内で8割

本県では、県医務労働組合連合会（県医労連）に加盟する30病院の看護職員8005人が回答。79・4%が「人員が少なく業務が過密」と答えた。「この3年間でミスやニアミスを起こしたことが

それぞれ10割、7・5割ある」との回答も90・6%に上り、県医労連は増員や勤務時間の見直しを必要性を訴えている。「疲れが翌日に残る」「いつか寝てしまう」と慢性疲労を訴えたのは計72・3%。「健康に不安がある」「健康に大変不安がある」は計62・2%だった。仕事を辞めたいと思うと答えたのは78・7%。その理由として「仕事が忙しすぎる」43・0%、「夜勤がつかない」34・9%などが挙げられた。妊娠経験がある人のうち「切迫流産」となったのは30・4%で、県医労連が調査した5年前の調査よりも9・1割増加した。

(0764-417360)

日本

北日本新聞
富山

看護職員の 7割が慢性疲労

全国の看護職員約2万7千人の健康状態について日本医労連が実施した調査で、「慢性疲労」を感じているとした人が7割を超え、妊娠をしたことがある約3500人の3

人に1人は、流産になりかける「切迫流産」を経験したと答えたことが26日、分かった。調査は昨年11月～今年1月、全国の医療機関や介護施設で働く看護師、准看護師、保健師、助産師を対象に実施。約6万人に調査票を配布し、計約2万7500人が回答。

女性が94%を占めた。健康状態が「非常に不調」「やや不調」とした人は計37・8%。「疲れが翌日に残る」「いつか寝てしまう」と答えた人は78・5%に上り、1988年の調査に比べ7・2割増えた。「健康に不安がある」は61・8%で、鎮痛剤や睡眠薬など何らかの薬を常用しているのは約6割に上った。